



TITLE:

北魏官營貿易に関する考察：西域貿易の展開を中心として

AUTHOR(S):

前田, 正名

CITATION:

前田, 正名. 北魏官營貿易に関する考察：西域貿易の展開を中心として.
東洋史研究 1955, 13(6): 476-504

ISSUE DATE:

1955-03-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/139027>

RIGHT:

北魏官營貿易に關する考察

——西域貿易の展開を中心として——

前 田 正 名

- 一 まえがき
- 二 北魏以前
- 三 北魏西域貿易の開始と第一波時代
- 四 太和に於ける府庫の集積
- 五 第二波時代
- 六 むすび

一 まえがき

北魏は世祖太武帝の時代から對西域官營貿易が展開された。この貿易の結果、タリム盆地周縁のオアシス國家、中央アジア、インド方面の諸國から珍奇な貨財が北魏にもたらされ、胡商は續々渡來し商販は北魏社會内に於て盛行、忍ちその反響を呼んでゐる。

太武帝の時始められた官營貿易は對西域諸國のみならず、蠕蠕、庫莫奚、高麗など北方、東北方の國々をも含んでいる。そして殊に太和年間に盛大に行われたようである。し

かし、これらの國々との間に營まれた貿易は對西域貿易に比べると、北魏社會に與えた影響は少い。西域渡來の珍寶類や諸種の技術は、當時たしかに北魏人の眼を眩惑したようである。多くの史料はいかにきらびやかな光を伴つて、それらが北魏社會に受け取られたかを示している。このような驚きの中に、我々は恰もサラセンの優れた自然科學が、科學精神の芽生えない周邊の國々には魔術的粘りを以て迎へ入られた歴史を想起する。

問題はこゝに存する。非常に水準の高い文明として受け取られ、異常な刺戟を與えた西域將來の珍奇な「珍寶」は、果して今まで説かれてきたような單なる奢侈品としての性格に止ったか、どうか。專制王朝が經營する官營貿易として交易が行われた以上、それは、國內で形成されていく北魏王朝のデスポティズム形成の陰影を宿しているものでは

ないか。

元來、中國北邊に於て游牧生活を主としていたと考えられる拓跋部社會が、從來の部族組織を解體して新しい郡縣的組織へと止揚されていく時、我々の眼に強く映ずるものは、その社會組織の變化と生活の轉變による國內の動搖である。これは勿論、いわゆる五胡十六國の動亂という外部的事情によることは考えられるが、このような社會と生活の激動の渦中にあつて、一貫してその方針を貫徹せんとする北魏王朝デスポティズムが周圍の抵抗にあつて起したものと考えるのは正しかろう。¹⁾

いうまでもないことだが、登國元年（三八六）太祖道武帝が諸部解整の嚴命を發し、分土定住せしめて遷移を許さず、諸部長、大人をも編民と同じくしてから、既に北族系貴族の反王朝的性格を反映した。²⁾ 有名な大人官制度の片影も薄れるにつれ、舊部民保護政策はおこたられ、一時的な領民酋長制といふ、八國制といふ、運命的な漢化の前にはついにこれすらおぼろなものとなつていった。そして孝文帝の徹底した政策轉換により、根底から舊部族的色彩を持つ組織は崩壊してしまつた。³⁾ こゝに北族系貴族の沈淪とい

う由々しい國內問題を殘す。

漢人による官路の獨占、均田制とこれに伴う諸政策の施行、舊部人の反感を買いながらも迫る漢化の途、これらは眼前に漢人社會を踏まえた北魏王朝の專制國家體制を整えようとする努力の現れに他ならぬであらう。しかし、均田制發布以後の勸農政策は王朝の異常な獎勵にも拘らず、決して成功したとは言えない。朝廷は明かに地方官吏の取締りに失敗している。⁴⁾ 屢々出された官吏に對する訓戒や、北魏末期に於ける國用不足を訴える廷臣達の動きに、この狀勢は窺える。

このような困難な狀勢の中にも、北魏王朝が異常な決意と努力を以つて、そのデスポティズムを形成していく以上、この態度は官營貿易に現れない筈はない。周圍の抵抗を排しながら、王朝權力の一翼を擔うものとして經營されたものと考えられる。それは、この官營貿易の消長、殊に西域諸國との貿易の消長をあとすけ、これに對する王朝の態度と支配階級の態度、貿易に關して王朝が周圍の支配階級に對してとつた態度、更に流入してきた珍寶類の流通過程を分析して見ることにより首肯されるものである。

民國三十七年、呂思勉氏が兩晋南北朝史を著され、北魏西域貿易は單に射利的性格であることを論斷され、最近、又、伊瀬仙太郎助教授が「北魏の西域經營」の中で射利的性格を述べられた。⁵⁾私は先學の諸論といさゝか見解を異にするものがあるので、こゝに小論を發表することにした。

二 北魏以前

一體、史上に現われる對西域官營貿易は前漢武帝の時代張騫の西域派遣の結果として起った東西交易が最初である。前漢書西域傳に

西域は孝武の時を以て始めて通ず。本、三十六國、其の後、稍々、分れて五十餘に至る。

とあるのがこれである。

元鼎年間には河西に武威、張掖、酒泉、敦煌の四郡を置いて西域貿易を掌握した。史記大宛傳にはこの間の消息を物語つて、

初め酒泉郡を置き、以て西北の國に通ず。因って益々使を發し、安息、奄蔡、黎軒、條枝、身毒國に抵る。

と述べている。同傳を追うて讀めば、漢代に於ては廣く吏

民から西域使者を願う者を募り、これに節を與え、交易品を所持せしめて派遣したものであることが知られる。

これは國家權力により營れる官營隊商團の派遣であつた。以來、斷續しながら六朝時代の動亂期に入るが、東西交易はこの期に一段と發展し、西域商賈が多數渡來して來た。やがて渡來西域人の子孫が北齊、北周の時代から徐々に社會的地位を向上して擡頭し、隋、唐に入り更に多くの西域人を迎えて、こゝに華麗な世界帝國の一面が織り成されていく。

六朝時代の西域貿易は、後漢帝國の崩壞と同時に活動を始めた諸民族の手により行われた。従つて次々と興亡する諸小國によつて經營され、それが北魏に受け繼がれてやゝ持續的に行われるまでには、殆んど河西に起つた國々により獨占せられたものであつた。以下五胡十六國時代になつてからの概觀を試みる。

この時代には河西に數多の小國家が建てられた。獨立國家形成の可能性が、農耕、牧畜共に恵まれた地域であることに存することは既に拙稿、「河西史の基礎構造」に於て述べた。しかし、一度びここに國が建てられると、いわゆる

「通廊地帯」に當っている爲に西域貿易の死命を制した様である。それは先ず、永興二年（三〇五）護羌校尉涼州刺史張軌が涼土に姑臧城を築いた時、その發端が見られる。すなわち前涼國である。

晉書卷八七張軌傳の中に、戰亂の絶えない涼土と長安の間を賈客が往來したことを偲ばせる記事があり、同書同卷の張駿傳にも、咸和九年（三三四）以來毎歲、涼土と建康との間に使者の往來が絶えなかつたことが見えてゐる。

前涼に於ては張駿の時代、咸和五年（三三〇）から本格的な官營西域貿易が始められてゐる。汗血馬、火浣布、その他奢侈品が將來された。我々はいかに前涼王の身邊に驚嘆に値する奢侈品が集積せられていたかを、十六國春秋の記載により知ることが出来る。

九世七十六年で前涼が亡び、太元二年（三七七）前秦が前涼に代つて河西の支配者となつた。この場合も同様に西域諸國から商賈が來、奢侈品はおびたゞしく流入してきた。苻堅はこの西域貿易に伴う商賈勢力の擡頭と、官僚の腐敗とを憂慮して貿易を制限し、商賈を壓迫した。且つ官僚の非違行爲者の處罰を行い、西域諸國の討伐さえ斷行してゐ

る。しかし、苻堅の時代に渡來して來た西域文明は、前涼時代に比して更に華やかなものが觀察される。晉書卷一一三苻堅傳上によると、苻堅のこのような貿易制限、商賈勢力抑壓の政策にも拘らず、國內の商賈はさかんとつてゐた。交通路は整備され、工商は各沿道で賈販し、旅人はいたる所で必要な品物を入手することが出来たという。殊に蘭州から長安に向う沿道には所々に驛亭が設けられ、商販が行われた。

この勢いはそのまま後涼に繼承され、呂光は建元十九年（晉太元七年、三八二）龜茲國その他西域諸國の討伐を行い、この結果、樂器、樂人などが多くもたらされた。呂光の姑臧城凱旋は更に珍寶類を姑臧に集積することとなり、呂氏の府庫のみならず、後涼の貴族達の手にも渡つていったらしい。太元十四年（三八九）は呂光が三河王と稱し、愈々河西に威を張る年である。この頃、北魏は北燕を降して中山を得、隆安二年（三九八）、拓跋珪は都を平城に移したのである。

隆安四年（四〇〇）李嵩が敦煌に西涼を建てる。が、僅かに東鄰善王の遣使が一回見えただけであつた。南涼は西

平に在り、河西通廊地帯から離れていたため、これ又、西域貿易に大した役割は負わなかった。

北涼は沮渠氏が姑臧に據って河西路を掌握し、北魏の世祖太武帝に降るまで河西路を通る貿易を支配した。この状態は北涼が屢々、北魏や宋に献ずる品目により知られるが、何より沮渠蒙遜が通過する商賈に交通税を課していた事實が明白にこれを物語る。

すなわち魏書卷九沮渠牧犍傳の中に、

切りに商賈に税し、以て行旅を斷するは罪の四なり。
と出ている事實である。

このような状況であつたから、沮渠氏も亦、將來される西域珍寶を府庫に集積することを得た。それは奢侈品としてだけでなく、いろいろな用途に充てられた。魏書卷三十六李順傳によると、世祖が蒙遜を討伐しようとした際、李順がこれに反對したが、それは實は蒙遜から賂として金寶を贈られたためであつたことを示している。

同じく同條の沮渠牧犍の條に、北魏討伐軍の侵入しない前、牧犍が姑臧城の府庫から金銀珠玉を持ち出したこと、毒藥を蓄えていたことなど記している。この記事は北涼王

に集中せられた西域將來の貿易品を示すものである。

前涼から北涼にいたるまで、河西に君臨した諸王は、いずれも對西域貿易により身邊に珍寶類を集積している。王は臣下や貴族達にこの珍寶が流れていくことを、極力警戒した。總して言えば河西諸國は國家規模が小さく、存續期間も短く、したがって一般に組織立った統一政權が持續的に官營貿易を行ったといふことはなかった。この故に、貿易開始に伴う社會の反應も、未だ明かに看取されないままに終つた。やがて西域貿易は北魏王朝の管掌する所となつたのである。

三 北魏西域貿易の開始と第一波時代

道武帝の頃は北魏の勢威が未だ河西地方を直接支配してない。大體、舊部民制を解體して新な編民化が完了したと思われる天興元年（三九八）平城に遷都して、中國の專制王朝の體制に入ろうとする。この時代は烏丸や高車の討伐を行い、丁零の内附も見られたから、京師を中心としてその支配はむしろ北方に延びていたと考えられる。¹⁰⁾

前述の通り隆安四年（北魏天興三年、四〇〇）には西涼

國が涼土に成立、翌年、沮渠蒙遜が張掖公に任ぜられ、北涼國の成立を見た。道武帝はこの時も直接、渡來する商賈や珍奇な貨物には接しなかった。たゞ有司が奏上して漢の故事にならない、西域を通じて威德を荒外に振い、また奇貨を天府にもたらしように勧めた。これは結局實現されず、次の明元帝時代にも行われていない。魏書西域傳に道武帝の語を載せて、

海内を虚耗ならしめて、何の利か之有らん

と記し、有司奏上に従わなかったことを示しているのを考へると、彼はいわゆる西域貿易による損耗を心配しているのであり、全力を擧げて新國家組織への基礎を築くのに餘念がなかったと察せられる。道武帝が天興元年、山東六州の民吏及び徒何、高麗、雜夷等三十六萬と共に、百工伎巧十萬餘口を京師に徙民していることが、この理解の一助となる¹¹⁾。

徙民政策は當初から北魏王朝デスポティズム形成の重要な方針であった。漸く平城に遷ろうとする直前、百工伎巧十萬餘口とは、當時の人口から推せば、驚く程の多數の技術者を京師に徙したものである。帝室の直轄として、これ

程多數の人々の勞働力を一定地域に投入して束縛、舊部族酋や漢人貴族社會の前に聳立するデスポットとなるための踏み石と爲したものと考えられる。¹²⁾この時、百工伎巧が特に含まれていることは極めて重大なことである。北魏王室は絶えず工巧の直接支配に深い關心を示し、官營貿易の華やかな展開とともに、種々な形で現われてくるからである。

元來、道武帝の頃は、未だ確乎とした新國家の基盤が出来ていない。しかも、周邊の叛亂に對しては始終警戒せねばならなかった。魏書卷二によると、

九年（太祖道武帝）、（劉）庫仁の子顯、眷（劉庫仁の弟）を殺し、之に代る。乃ち將に逆を謀らんとす。商人王霸、之を知り、帝の足を衆中に履む。帝乃ち馳せて還る。

と出ている。商人である王霸が衆中に帝の足を踏んで叛亂を豫知している。

このような危険を藏した状態に於て、西域貿易が經營せられなかつたのは、道武帝の「海内を虚耗ならしめて……」の美しい形容にも拘らず、北魏王室の内部事情に基ずく必然的歸結に他ならなかった。そしてこの場合、我々はいか

に道武帝が商人王霸と親密な關係を持っていたかを注視する必要がある。いかに身分制嚴守という表面的訓戒がその後、屢々出されたにせよ、畢竟それは粉飾された社會秩序であつて、デスポットがこのような粉飾の奥に自己發展の一翼柱としての特定商人を抱え込んでいることを透視せねばなるまい。

さて北魏が積極的に西域貿易に従うのは、世祖太武帝の時代である。始光から延和にかけての頃は、未だ長安、平涼方面でさえ、太武帝の支配下に入っていない。そして赫連昌、赫連定と争いを繰返さねばならなかった。

延和二年（四三三）長安城は修築され、沮渠牧犍は北魏より河西王として封ぜられた。延和三年（四三四）、秦王赫連昌は殺され、こゝに太武帝は沮渠牧犍を配下に置き、河西と平城の間の覇權を掌握したため、西域諸國との交易の基盤が成立した。¹³⁾ 魏書西域傳によれば、太延に入り、王恩生、許綱等が遣され、蠕蠕のために捕えられて失敗したが、引き續き董琬、高明等が多く錦帛を携行して發し、西域の招撫に成功している。魏書卷四上によると、太延元年に二十輩、同二年に六輩が西域に遣されているのである。

こうして北魏の西域貿易は開始された。河西王沮渠牧犍が常に北魏から西域に派遣される使者の護送に任じていたことは史上に有名である。牧犍は通路を制しているため富強を來し、ついに太延元年（四三九）太武帝は牧犍討伐を敢行せねばならなかった。まえがきに觸れたように、沮渠牧犍は姑臧城を攻陥され、北涼國はこゝに全く滅亡してしまった。以後、太平眞君元年（四四〇）以來、北魏が經營する對西域官營貿易は開始され、同じ時期、對北方、東北方諸國との官營貿易も開始される。

こゝに言う官營貿易とは、「朝貢」「朝獻」等と表現せられてゐる諸國の來朝を指す。それは來朝して自國の品を獻じ、これに對して見返り品として中國王朝側から絹その他を與えるいわゆる「朝貢形式」による官營貿易が營れるからである。¹⁵⁾

魏書に記載された朝貢回数とその國に注意し、同書に載せられないものは北史に従い、その消長察知の手がかりとして、「西域諸國朝貢朝獻表」を作製してみた。¹⁶⁾ 既に同種のものに伊瀨仙太郎助教授の研究があるが、記載する西域諸國の名が少いのと、専ら魏書だけに依據されているので、

[illegible]

									太和 1	承明 1	5	4	3	2	延興 1	4	皇興 3	
																		勅 勒
			○			○○○	○	○○		○	○○	○	○					烏孫 吐谷渾
																		宕昌 鄯支
																		敦煌 鄯善
																		于闐 悉居半
																		渴槃陀 高昌
								○○			○							焉耆 龜茲
																		疏勒 悅般
																		耆舍 破洛那
							○					○						粟特 普嵐
					○	○				○				○				悉斤 厭陁
										○								波斯 闐賓
																		遮國 烏菴
																		居密 伏羅
							○											河襲 曹利
												○						南天竺 西天竺
									○									備
									○									考

○員闐提婆國合衛疊伏羅沙
多羅朝貢

魏書に載せず

2	正 始 1	4	3	2	景 明 1	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10
				○					○		○		○○○		○○○	○○	○	○○
					○													
			○															
			○								○ 魏書に載せず							
			○														○	
			○															
			○															
			○															
			魏書に單に天竺と載す															

にはおびたゞしい數の商賈が集中して居た。有名な魏書粟特國の條に記載せられた記錄は改めてこゝに引用するまでもなからう。とにかく、前漢以來の華やかな西域文物が民間では行われていたのである。¹⁰⁾

さてもとに戻って作製した朝貢表を一覽しよう。太延元年より太和の初年にいたる間、比較的に繼續して行われている。これが第一波時代である。ところが太和五年（四八一）から景明二年（五〇一）まで空白の期間が続く。そして景明三年（五〇二）から再び活況を呈し、神龜・正光の間はその極盛期を現出している。これが第二波の時代である。前に述べたが、北方、東北方諸國の朝貢はこのような波動は畫かない。太延元年、蠕蠕、庫莫奚の朝貢があつてから和平末年まで餘り見られず、和平末年から神龜末年にいたる間、持續的に行われている。そして正光以後は衰えを見せている。

總して北方、東北方諸國の朝貢が、西域諸國のそれと無關係な如くに行われている。これは、中央アジア、インド方面の國々が、「河西通廊」地帯を経由して北魏に到來する以上、専ら河西の形勢により消長が決定されるという特殊

の事情に基く。

貿易の第一波がおし寄せてくると、忽ち北魏朝の人々を眩惑する高度な文明として受け取られている。魏書卷一〇二月氏國の條に

世祖の時、其の國人、京師に商販す。自ら言う、能く石を鑄て五色の瑠璃と爲すと。是に於て鑛を山中に採り、京師に於て之を鑄る。既に成る。光澤乃ち西方より來る者よりも美なり。乃ち詔して、行殿百餘人を容れるものを爲らしむ。光色映徹し、觀者之を見、警駭せざるものなく、以て神明の所作と爲す。此より中國の瑠璃、遂に賤人すら復、之を珍しとせず。

大月氏國から渡來し、商販に従つていた者が、京師に於て瑠璃製造に従い、京師の人々を驚嘆させた。瑠璃の傳來は前漢にも見られたが、この時、瑠璃製造技術者が來たことにより、元來珍貴な瑠璃製品が餘程一般化したことが知られる。文中、やや誇張を感じる向もないことはないが、粗野な舊部族生活の舊態を脱して漸く中國的專制體制へと入つていく彼等にとつて、西域傳來の技術がいかに高度なものとして眼に映じたかは察せられよう。¹⁷⁾

北史卷九〇何稠傳に、隋の開皇中のこととして「時に中國久しく瑠璃の作を絶す」との記事がある。とすれば、既に隋初、折角傳來した瑠璃製造の技術が忘れられてしまっていたことが判る。これについて呂思勉氏も北魏に伝えられた瑠璃製造技術は一時的なものでしかなかったと論ぜられて¹⁸⁾いる。魏書卷一一四釋老志に

太安の初め、師子國胡沙門邪奢有り。多浮陀、難提等五人を遣し、佛像三を奉る。京師に到る。皆云う。西域諸國を備歴し、佛の影迹及び肉髻を見る。外國諸王相承ぎ、咸、工匠を遣し、其の容を摹寫するに、能く難提の造る所の者に及ばず。

とある。以て難提の造像技術の優秀さがうかがわれる。

このように渡來してくる商賈、沙門の中に特殊技術を有した者が多い。河西を東に出れば、蘭州、長安が驛亭都市で多數の渡來した人々の集る所であった。前に赫連昌は長安を根據地の一つとしていた。太武帝が赫連昌と戦った時、長安は戰場となるが、こゝに西域珍寶類が多かった。彼を破った時、多くの珍寶類を得ていることにより察せられる。前秦、苻堅の時代、長安が東西交易の盛大な市場であった

ことを想起すれば、この理解の助けとならう。太武帝の時、流民が長安に送り込まれる場合もあった。このような東西衆會の地であったから、河西を通る貿易が盛行すると同時に、西域人が長安に來住したことは容易に考えられる所である。¹⁹⁾太武帝は延和二年（四三三）こゝに長安城を築いた。魏書卷四下太平眞君七年（四四六）の條に次の注目すべき語が見える。

長安城の工巧二千家を京師に徙す。

これは諸州の沙門を坑にした時、同時に斷行しているのであつて、當時、二千家も多くの工巧が長安城中に住んでいたことゝ、寺院がこの工巧を隸屬せしめていたことを示すものである。沙門の坑と同時に往つたことがこれを物語る。そして當時、寺院が祕密裡に寺内に寶器類を有していたことを知れば、太武帝の處置は長安城内工巧が寺院に服屬するのを斷ち切つて、京師に移徙したものであろう。²⁰⁾

前々年の太平眞君五年（四四四）次の如き重要な詔勅が發せられている。

詔して曰く、愚民は識無く、妖邪を信惑し、私に師巫を養い、識記、陰陽、圖緯、方伎の書を挾藏す。又、

沙門の徒は西戎虚誕を假り、妖孽を生致す。以て政化を臺齊にし、淳徳を天下に布く所以に非ず、王侯より以下庶人に至るまで、私かに沙門、師巫、及び金銀工巧之人を養う者あらば、其の家に在る者は、皆官曹に詣らしめ、容匿するを得ず。今年、二月十五日を限り、期を過ぐるも師巫、沙門を出さずんば、身は死し主人は門誅す。相を明かにし、告を宣し、咸、聞知せしめよ。

漢人社會を眼前にし、從來の北邊游牧生活から脱して躍進せんとする北魏王朝デスポティズムにとっては、沙門、師巫を中心に結成される祕密結社の反王朝的策動を怖れたものである。²¹⁾問題はしかし、これと同時に「金銀工巧之人」を悉く官曹に届けしめる措置である。これは明かに民間に金銀工巧を私有して、この勞働を通じて金銀寶器を製作せしめていた者が多かつた證佐に他ならない。試みに北齊の例を引こう。

北齊書卷四七畢義雲傳によると、彼は北齊時代ではあるが、工匠を私藏し、金銀器物を製していた。やがて發覺して罪せられるが、この事實は太平眞君五年の詔勅が意味す

る所を補つて充分であらう。

更に北魏以前を考察して證據を示すと、晉書卷一〇六石季龍傳がある。石季龍は咸康年間（咸康元年〓三三五）に前涼と東晉との交通を妨げ、河西に居た者である。こゝに西域の珍貨が流入して、石季龍の身邊に集積されたが、同傳中に

「女、鼓吹、羽儀、雜伎、工巧を置き」と出てゐる。文中「工巧」を蓄えていたことは、同文中の「漆瓦、金鑑、銀櫨、金柱、金壁」など金銀工巧技術所有者ではなかつたか。

しかも、當時の北魏社會内では、寶器類が民間に流通している。太武帝の排佛の際、寺院に金銀寶像があつたことや、各寺に州郡牧守が藏物を寄附していることなど、魏書釋老志の記載はこれを裏附けよう。

太平眞君五年の禁令を追うて讀めば、

今、制して王侯より以下、卿士に至るまで、其の子息は皆太學に詣らしむ。其の百工伎巧、騶卒の子息は常に父兄の業とする所を習いて、私に學校を立つを聽さず。違う者、師身は死し、主人は門誅す。

となつてゐる。百工、伎巧は必ず父兄の所業を習ひ、學校に行くことを許さない。かつて道武帝が百工伎巧十萬餘口を京師に徙民した方針がそのまゝこゝに表現されている。

苻堅が西域貿易の隆盛とともに擡頭してきた商賈勢力を抑えるため、身分維持の嚴命を發したのを思えば、太平眞君五年の年も、既に本格的西域貿易が開かれてから數年を経過してゐることに注意を要する。

すなわち、長安の工巧を京師に徙した年も、金銀工巧の人の届出を嚴命、工巧にはその分を守るべき命令を發したのも、共に西域貿易開始後數年を経た時で、一應、北魏社會に反應が現れる頃に當つてゐるのである。洛陽伽藍記には神龜正光の貿易極盛期に、いかに諸工が商人と共に富裕となつて擡頭したものであるかを示してゐる。²³⁾

ひるがえつて、北魏王室に眼を轉じると、王室には驚嘆される程の珍寶製作技術者を有してゐる。魏書卷一一〇食貨志、和平二年の詔によると

和平二年秋、中尙方に詔して黄金の合盤十二具を作る。徑二尺二寸、鏤するに白銀を以てし、鈿するに玫瑰を以てす。其の銘に曰く、九州貢を致し、殊域來賓す。

乃ち茲の器を作る。錯用具に珍しく、鍛するに紫金を以てし、鏤するに白銀を以てし、範圍、吐耀を擬載す。眞を含み、織文、麗質、化するが如く、神の如し。

とある。たしかに王室は奢侈品製作技術者を保有していた。これを徙民政策により自己の直轄としていたのであり、寺院、官僚、等から隔離してきたものであった。太平眞君十二年（四五二）には、太子が市中に商販してゐる。²⁴⁾ 太武帝が功臣に金寶を與えてたこともある。

太平眞君九年（四四八）悦般國が幻人を送つてきた時、太武帝は厚くこれを遇した。そればかりではなく、帝は人々をして幻人の有する術を學ばしめてゐる。又、鼓舞之節が來朝した時は、樂府に移して管理してゐることが見える。²⁵⁾ しかれば北魏と雖も、粗雑にして渡來技術に驚くばかりではなく、これを管轄するにつき關心は拂つてゐるのである。特殊技術の國家管理には強い意圖が現れて、それが王室に集中され燦然と光彩を放つ寶器として製作されてゐるのを見る。

四 太和に於ける府庫の集積

まえがきに述べたように、北魏は孝文帝の時期から政策が大きく轉回してゆく。それは漢化への途を辿りながら、郡縣制的に再編成されていくとする。この時、「工巧」に對し從來とつた直轄一筋の方策は變化した。魏書卷七上、延興二年（四七二）の詔に

工商雜伎に詔して、盡く農に赴くを聽す。諸州郡、民に課して益々菜果を植う

とある。勸農政策の現れが、こゝにまで及んでゐる。當時、頻々と發せられた官吏訓戒の詔にも拘らず、地方の實際政治は決して成功してゐない。多年、戰禍に曝された山野に勸農の方針を貫いていくことは容易なことではなかつた。²⁷⁾太和元年、次の詔が出された。

八月丙子、詔して曰く、工商皂隸は各々厥の分有り。而も有司は縦に濫り、或は清流に染む。今自り、戸内に

に工役ある者は本部に推上し、丞已下は次に準じて授く。階籍元勳、勞を以て國を定めし者の若きは此の制に従わす。

右は官僚層から工商皂隸を解放しようとするものである。從來、幾度びか發せられた身分制嚴守の命にも拘らず、官

僚と工商人が親近になり、官僚は戸内に工役を有していたことが知られる。

一切の官僚に工人、商人を私有させず、隸屬關係を斷ち切つて農に赴せることは、王權強化の具體策であつた。やがて發せられる均田制に先立つものである。解放されて農耕に従う者は、中國的專制體制を急ぎ漢化していく北魏王朝の基盤である。この年、太和元年は朝貢國多く、員闕、粟提婆國、舍衛、疊伏羅、車多羅等、及び西天竺が到來、天府には又も奇貨が集められた。

國家に功勞のあつた元勳に對してはこの命を適用せず、丞以下は次に準じて私有を許したことは、なお確立し得ない北魏デスポティズムが妥協をしたものと見るべきであらう。

太和五年（四八一）以降、景明初年まで貿易は東北方、北方諸國とは行われるが、西域方面との貿易は杜絶えた。これは河西地方が吐谷渾に制せられたからである。

吐谷渾は太和の初めから年々朝貢しているが、太和五年、北魏に反した拾寅が死し、子、度易侯が立ち度易侯は宕昌を討つた功により北魏から錦綵百二十四匹を賜つた。度易侯

の子、伏連籌が立った時、吐谷渾の勢威は盛大で、西は敦煌にまで達し、河西通廊地帯は全く北魏を離れ、吐谷渾のために制壓せられてしまった。魏書卷一〇一吐谷渾傳にこの間の事情を述べて、

伏連籌、内に職貢を修するも、外に戎狄塞表之中を併せ、號して彊富を爲し、天朝に準擬し官司を樹置して制を諸國に稱す。以て自ら大を誇る。

とある。その上、太和三年、蠕蠕は宋と約して北魏の攻撃をすることになっていたので、²⁸⁾太延、和平の頃よく行われた河西行幸は絶えて見られなくなった。太和五年以來、西域貿易の斷絶はこのような國際狀勢を如實に反映したものである。

さてこの狀況の中で、均田制態勢は一步步進められていく。官吏訓戒、婚姻制嚴守等の詔令の發せられるのは従前通りである。太和八年（四八四）ついに官僚俸祿制が發せられた。魏書卷七上によりこの詔を示そう。

六月丁卯、詔して曰く、官を置きて祿を班ち、之を行ふこと尙し。……

始めて俸祿を班ち、諸商人を罷む。以て民事を簡にし、

戶に調三匹、穀二石九斗を増し、以て官司の祿と爲す。預調を均くして二匹の賦と爲し、即ち商用を兼ね

文中、「諸商人を罷む」とあるのは、これまで中央官府に雇用されていた特定の商人が居たことを證している。末文の「商用を兼ね」とは官僚がそれまで商業行爲に従っていたことを示している。官僚層は商販によって各々、利益を得、政府は御用商人を抱き込んでいたのであった。この場合、商人が賣買して最大の利潤を生ずるものは、疑もなく西域傳來の奇貨珍寶の類であつた。以下、西域將來の珍寶に關する所見を述べる。

一體に當時いわゆる「珍寶」と言われる輸入品は、珊瑚、瑤瑤、瑠璃、琥珀、金銀寶器、金寶等種々數えられる。共通した點は稀少な物質であり、元來、中國產のものでなく、極めて珍奇な貨財として珍重されたことである。しかも、實用的價值はなく奢侈品であり、殊に裝飾用に効果があり、いずれも審美的所屬性を有していた。そして變化しにくい性質を持っているので、そのような價值は永續するものとせられていた。

このため、當時の社會内に於て交換價值は素晴しく高く、

貨幣價值は高價を呼んだ。これ入手する場合は「富」を得ると同様であり、珍寶の商販は莫大な利益を得ることであつた。史料を示すと、周書卷三七韓褒傳に

十二年（大統）都督西涼州刺史に除せらる。羌胡の俗は貧弱を輕んじ、豪富を尙ふ。豪富の家は小民を侵漁し、僕隸と同じくす。……又、富人の財物を調し、以て之を賑給す。西域の商貨至る毎に、又、先ず盡く貧者に之を市わしむ。是に於て貧富漸く均しく戸口殷實す。……

西魏大統年間のことである。西域商賈が來れば貧者に先ず買わしめたために、涼州に於ては貧富が均しくなつたという。これも若干の誇張は警戒せねばならないが、西域將來の品を入手すれば富んだという事實は認めねばならぬ。

均田制體制が既に發足した太和十一年（四八七）寶貨は市里に多く賣買せられ、工商之族は玉食錦衣していた。魏書卷六十韓麒麟傳に、

太和十一年、京都大いに飢う。麒麟、表して時務を陳べて曰く、……
工商之族は玉食錦衣し、農夫は精糠を舗す。蠶婦は短

褐に乏し。故に耕者は日に少く、田は荒蕪有り。穀帛は府庫に罄き、寶貨は市里に滿つ。

と出ている。太和の西域貿易斷絶期に於ても既に流入していた西域珍寶類は市里に流通していた。專制王朝の經濟的基盤が均田農民に存することを認め、時務を慨嘆した韓麒麟の語を通じ、我々は太和の北魏社會に於ける珍寶流通の狀況と、商販の盛況とを察知し得る。

北魏王朝はこのような利益を生む商人が官僚に私有せられないようにした。太和八年の俸祿制發布の際、俸祿を支給して生活を保障し、以て官僚と商人の結合する口實を消し、商賈と珍寶から得る利益はすべて王室御府中に蓄積せんとしたものでなかつたか。

果して太和七年（四八三）、魏室は内藏の寶物を市中に賣り、特定の賈人にこの商販をさせていたのである。通鑑卷一三三に

永明元年冬十月（太和七年）丙寅、驍騎將軍劉纘を遣わして魏に聘す。魏の主客令、李安世、之を司る。魏人、内藏の寶を出して賈人をして之を市に鬻がしむ。纘曰く、魏は金玉を大いに賤しむ。

と見える。又、北齊書卷二八、元韶傳に、

齊の神武帝、孝武帝の後を以て之に配す。魏室の奇寶

多く後に隨うて入る。韶の家に二玉、鉢に相盛りて轉

すべくして而も出でざるもの有り、瑪瑙の榼、三升の

玉を容れて之を縫う。皆、西域の鬼作なり。

とあるから、魏室に西域將來の珍寶類が集積されていたと

考えて先ず差支えあるまい。

集中させた御府中の珍寶は、饑民賑恤の恩威として役立

てられる。正にデスポティズム形成の恰好の具であらう。

太和十一年（四八七）京都の民が飢えた時、魏書は次のよ

うに記している。

時に承平日久しく、府藏盈積す。詔して盡く御府の衣

服、珍寶、太官雜器……を出し、外府衣物、繒布、絲

纈、諸所の國用に供するものは、その大半を以て、百

司に班齊し、下は商工皂隸に及ぶ。

先に太武帝が功臣に金寶を與えた故事を想起すべきである。

このようなことは河西諸國にも、南朝の場合にも見られる

のであるが、北朝に於ても見られる。永熙の頃（永熙元年

〓五三二）孝武帝は騎射を善くする者に對し、銀酒卮を與

え、西魏文帝は金卮を置いて、これを公卿に命じ射させた

故事がある。又、北齊の帝室は常に御用商人を擁し、世祖

がこの商人に命じて胡后のために、寶物を市中に賣らせて

いる。北齊書卷四には、

其の魏の御府、有する所の珍奇、雜綵は常に人に給せ

ざる所、徒に蓄積を爲す。

と出ているのは、とにかく帝室に多く蓄えていたことであ

る。こゝに太和元年（四七七）の例を引く。

魏書卷一〇三蠕蠕傳に

太和元年四月、莫河去汾比拔等を遣して、良馬、貂裘

を來り獻す。比拔等稱す、伏して承るに天朝の珍寶、

華麗にして甚積すと。之を一觀せんことを求む。乃ち

有司に勅し、御府の珍玩、金玉、文繡、器物、御廐文

馬、奇禽異獸及び人間宜しく用うべき所の者を出し、

之を京肆に列し、其を歷觀せしむ。比拔、之を見て自

ら相謂つて曰く、大國富麗、一生、未だ見ざる所なり

と。

御府中に奇禽異獸まで飼われているのには呆れるが、北方

遊牧民達に對する示威には充分役立つことであらう。

俸祿制の確立、均田制の發布、珍寶と商賈を官僚層から斷絶して、このような集積が御府に在る。それは飢民賑恤、論功行賞、遊牧民への示威として、「承平久しい太和」のデスポティズムの一翼と爲されているのを知るべきである。

五 第二波時代

驕慢であつた吐谷渾の伏連籌は景明初年から（景明元年 500年）北魏に恭順となつた。そして正光年間にいたる間、吐谷渾は隊商を導いて北魏に來た。景明三年以降に現われた西域貿易の第二波はこのためである。第一波時代より一層さかんに貿易は行われる。この時期には一覽表でも解る通り、高昌とにも嚙噬の活動が目立つ。

景明、正光年間の西域貿易はタリム盆地のオアシス國家、中央アジア、インド方面の國々が多數來貢するので、官營貿易による西域將來の品物は太和初年以前のそれよりも更に激しく流入したものと考えられる。

特に神龜、正光の間（神龜元年 518年）は、北魏朝一代を通じる官營貿易の極盛期である。北方、東北方からも朝貢する國が多い。吐谷渾は皇興三年（469年）内附して

以來、延興三年（473年）に朝貢あり、西域貿易の中断期を通じ唯一の貿易獨占國として登場している。景明以後も引續き朝貢し、官營交易に従っている。高麗、庫莫奚、勿吉等、河西路を通らない北方の國が多く來貢している。北史、景明三年の條によれば、

此の年、西域二十七國、遣使朝貢す。

とあり、正始四年の條には、

此の年、西域、東夷四十四國遣使朝貢す。

と述べている。當時の府庫には珍奇な貨財が集積された。

魏書卷一一〇食貨志には、

魏德既に廣つてより、西域、東夷、其の珍物を獻じ、

王府に充つ。又、南華に於て互市を立て、以て南貨、

羽毛、齒革の屬を致す。遠しとして至らざるはなし。

神龜、正光之間、府藏盈溢す。

と述べている。

しかし、正光末の反亂により、交易活動の極盛期は急に影をひそめた。そして再び社會は動亂の渦中に投ぜられた。この狀勢の中に於ても王府の珍寶は依然集積せられたまゝであり、東西兩魏分裂期は勿論、北齊、北周時代にも持ち

込まれていったらしい。³²⁾

さて帝室の府庫に珍寶を集積すれば、貴族、豪門、官僚は祕かに自己の庫に同様の珍寶を集積しようとした。これを禁ずる爲に奢侈禁令の詔勅が發せられた。延昌二年（五一三）のことである。

九月丙辰、貴族、豪門、奢侈に崇習するを以て、尙書に詔す。嚴に限級を立て、其の流宕を節せよ。³³⁾

こゝにも階級嚴守の強制が見られるが、階級を嚴守することとは要するに奢侈品の所持を禁ずることである。交換價値の高い輸入奢侈品の所持に制限を加え、官僚、貴族、豪門の前に拔き出る北魏王室の權威確立を企圖したものと考えられる。たとえば時代はやゝ下るが、北齊の高官、高德政は帝室にない珍玉を有していたゝめに、夫妻ともに忽ち斬殺されているのである。しかも德政はこの珍玉を略として受け取ったものである。北魏の場合にも同様なことは考えられてよい。³⁴⁾孤獨のため自存出来ない鰥、寡に對する賑恤、貧窮の救濟等、帝德の恩威を施す一連の善政ととも、³⁵⁾デスポティズム樹立の側面を形成する粉飾として「奢侈嚴禁、階級嚴守」及び「風俗肅勵」が洞察される要があらう。

正光三年（五二二）に次の詔が下された。

丁亥、牧○守○妄○りに碑○頌○を立て、輒○く寺○塔○第○宅○を興し、店○肆○の商○販○を豊○修○にするを以て、中尉端衡に詔し、威風を肅勵し、以て事を見て糾劾す。七品、六品の祿は耕すに代るに足る。亦、店肆を錮貼し、利を城市に爭うを聽さず。³⁶⁾

官吏が店肆を並べ商販に従うので、朝廷は中尉端衡に命じ監察させた。若し官吏の商販行爲があれば威を以て糾劾したのである。前に官僚の俸祿制が發布され、既に耕すに代るに充分な収入が與えられてある筈だから、こゝに重ねて彼等の商販行爲を嚴禁したものであった。太和八年、珍寶と商人との官僚層からの分離の意圖が、正光三年にも貫徹されようとしている。正光三年と言へば、數年前から官營貿易が最高潮に達している時期である。すなわち、民間交易活動が「朝貢形式」による官營交易活動の盛況と相應じ、巷市に活潑に行われていたものであった。

洛陽伽藍記卷四城西の條に

市○の○東○に通○商○、達○貨○の○二○里○有○り。里○内○の○人○、盡○く○皆○、工○巧○、屠○販○し○生○資○と○爲○す。財○は○巨○滿○な○り。劉○寶○な○る○者○

あり。最も富室を爲す。州郡、都て會する處、皆、一宅を立て、各馬一匹を養いて監粟に到る。貴賤となく市賣し、高下所在、一列す。舟車の通する所、足蹟の履む所、商販せざるはなし。是を以て海内の貨は威、其の庭に萃る。産は銅山に匹^ない、家に金穴を藏し、宅宇、制を踰ゆ。樓觀、雲に出て車馬服飾は王者に擬すとある。洛陽城内の當時の光景を示すものである。通商、達貨という名も實に狀況を偲はせるに足る。こゝに身分を問はず皆、一宅を立て、商販したらしい。

汝南王の弟、悦は洛陽の景樂寺を修築したが、諸音樂娼伎、奇禽、怪獸、舞朴等、未だ當時の北魏人の見ないものが集まり、異端・奇術もそこに集中していたとい³⁷⁾う。これは明かに中國のものでなく、外國から將來されたものである。

これ程にまで國內商販が活況を呈する有様であつたから、商工人の擡頭が顯著であつた。神龜中、商賈、工巧に對する抑壓策が行われた。洛陽伽藍記卷四の中に、
神龜中、工商上潛するを以て金銀錦繡を聽さず。此の制、立つと雖も竟に施行されず。

とある。工商抑壓の禁令は一片の空文にしか過ぎなかつた。上下を擧げて商販に狂奔した大勢を察知すべきである。元來、北魏に於ては中央の政令が、どれだけ地方にまで徹底させられたものかは甚だ疑わしい。神龜年間、工商階層に對する禁令が實行され得なかつた事實に鑑みても、正光三年、官吏の商業行爲禁止令がいかに程に守られたものだろうか。むしろ「威風を肅勵し」糾劾せねばならなかつたことから推せば、官僚階層は擧げて商販していたものではないか。

北魏の王室はこの時も、珍寶の集積を續けていく。北魏の永熙年間、孝武帝が騎射を善くする者に對し、銀酒卮を賜つたことは前に述べた。しかし、國用を損耗して莫大な代價を拂い、外國將來品を受け入れていたらしい。景明の初め、邢巒が上奏して

景明の初め升平の業を承け、四疆清晏、邇に來同す。是に於て蕃貢路を繼ぎ、商賈、交入し、諸の獻賀する所常に倍多す。加うるに節約を以てすと雖も、猶、歲に萬計を損う。珍貨は常に餘りあるも國用は常に不足す。……³⁸⁾

と言っている。國用が不足するとは諸國獻貢する珍貨に對する見返り品として與えるからである。第二波の當初に於けるこの反省は、この後數年間の貿易斷絶に現わされている。要はともかく北魏朝廷に蓄えられる珍寶類は莫大な國用の代價であることを知ればよい。極盛期の正光末に遠來の蕃客が來貢し、交易が行われるが、いかにそれが消耗を來したか、魏書卷一一〇食貨志によつて見よう。

正光の後には四方事多く、加うるに水旱を以てし、國用不足す……

遠蕃の使客は斷限するに在らず、爾後の寇賊は轉衆し、諸將の出征は相繼ぎて奔敗し、失う所の器械資糧は數うるに勝り可からず。……有司又奏す。内外百官及び諸蕃客の稟食及び肉は悉く二分して一を減ぜば、終歲計するに肉は百五十九萬九千八百五十六斤、米は五萬三千九百三十二石を省く。

蕃客とは呂思勉氏に據れば西域から來る商賈を指すらしいが、南海から又、北方、東北方から來貢する者をも包含していると解すべきであろう。西域貿易極盛期に於て、蕃客の稟食節約が論ぜられている所を考えれば、やはり西域渡

來の商賈が主となつていふと見ねばならない。北方諸國の朝貢は、西域諸國の朝貢の様に判然とした消長の波動を畫いていないからである。

神龜元年（五一八）、河州の民が叛亂した。翌二年、洛陽の近衛兵が叛した。更に正光に入り南秦州の氏が叛亂、愈と正光四年。多年の沈淪を破つて北邊に於て、いわゆる六鎮之亂が勃發した。³⁹⁾

正光五年二月、この全國的動搖の中にも嘯嘩の朝貢は續く。そして吐谷渾の伏連籌が涼州の辛菩提を攻めてから、北魏官僚である涼州刺史は全く無力化し吐谷渾に制せられてしまった。⁴⁰⁾ 爲に河西路は斷絶され、多くの西域朝貢國も姿を消した。正光末の叛亂を以て、北魏の官營西域貿易はその第二波時代を終る。

六　　す　　び

徙民政策は早く穆帝の時代から行われ、北魏王朝の專制體制を整備していく上に重要な契機を爲している。特に北魏朝に於ては技術者の國家管理に深い關心が拂われ、道武帝の百工伎巧の京師移徙にそれが表現されているのである。

したがって太延以來、西域との官營交易が開かれ、これに應じて民間交易も活潑となり、珍寶、奇貨等と呼ばれる極めて水準の高い技巧を要して出来た奢侈品が流入し、商賈につれて技術者が渡來してきた時、道武帝以來の工巧管理に對する強い意圖が貫徹されているのを看取する。

第一波の時代には「身分制維持」「婚姻制嚴守」の詔令の裏にこの姿が秘められている。⁴¹⁾太武帝は殊に斷乎とした處置を以て技術者の朝廷直轄に意を用いている。

ところが孝文帝時代から大きい政策轉換が北魏の社會を搖がした時、從來の方針を變えて官府が管轄する商工皂隸は出来るだけ民間に放出し、使用希望の者にはこの使用を許しさえしている。⁴²⁾狙う目的は主として勸農の大方針に沿わしめるためである。⁴³⁾我々は孝文帝の異常な決意さえ感じるが、太和八年の百官班祿の際に行われた官僚層から商賈を斷じようとした措置に、北魏デスポティズム形成過程に於ける見事な一つの結節點を見出した。翌年均田制發布、つゞいて三長制の成立と、新しい歩みを辿る中に、王室に積まれた珍寶類がおびただしく、しかも帝德宣威の爲にそれが重要な役割を果たしていたからである。

太和に於ける北魏王室の珍寶集積は、王室と特定の關係にある商賈が、第一波時代より活動したことが大きい力となっているようである。

渡來する西域商賈は一般に支配階層と極めて親近の關係を結んでいた。このことについては機會を見て論じたいと考えているが、道武帝と王霸、太武帝と涼州賈胡の關係が一端の證となろう。⁴⁴⁾彼等は中國に來る途中の山川の形勢に詳しく、したがって遊牧民の軍事上の動靜にも通じ、北魏皇帝にとって貴重な情報を提供する者であった。⁴⁵⁾具體例は多いが、とにかく、皇帝とは相利共棲の立場にあったことを忘れることが出来ない。

第二波時代には上下を擧げて商賈に従う時で、洛陽城光景はこの盛況を示してくれた。北魏デスポットは監察官を派遣して官僚の商業従事を糾劾しようとしたが、貿易極盛期に於ける風潮の大勢はいかんとも爲し得ず、商賈工巧の擡頭が顯著であつた。この爲め、民間に流通する珍寶を王府に集中しようとするデスポットの意圖は空文に終つた。

太武帝より孝文帝を経て、商賈、工巧に對する態度は曲折してこゝに至るが、事情は全く異つて、貿易を通じてデス

ポティズム確立に役立てることは餘程なくなつたと考えられる。

さて呂思勉氏の研究にもあるが、從來、北魏にもたらされた西域奢侈品は單に射利的に行われた活動の結果である、という論は當を得ていない。

北魏一代を通じて、常に王室に珍寶が集積されようとしてゐるし、又、デスポティズムの確立のため、貴族、豪門、官僚層にそれが流入していかないように警戒してゐるからである。このことは、北魏以前、河西諸國の狀況と、東西兩魏、北齊、北周の時代にまで視野を擴大すれば理解される。

當時、交換價值の高かつた珍寶の中、殊に金銀寶器類が高價であつたと思われる。貴金屬である金、銀に、高度の技巧をこらして珍奇な形にした奢侈品、裝飾品は、たとえ實用には供せられなくとも、原料の屬性から考えれば首肯されることである。稀少の金屬である上に單位體積の比重が重く、地金が均質で價值尺度ともなり、融解すれば良質貨幣ともなる。⁴⁶⁾したがつて、「金銀工巧之人」の社會的意義は大きい。

北魏皇帝はこれら珍寶を賑恤、行賞、示威、貨幣の獲得等、多方面に用いた。デスポティズム形成の重要手段として使用したのである。國內に於て進められる均田制的收奪體制と、正に相應じるものであり、北魏王朝の性格究明の側面がこゝにある。

以上の如く考察すれば、貿易開始とともに將來された西域品は、「奢侈品」「享樂品」であり、單に日曜日的審美感を樂しんだもの、とするわけにはゆくまい。

最後に一言附加しておきたい。それは、西域より渡來した一部の技術は、北魏社會に習得されたが（前掲、瑠璃製造など）、それも一時的なものしかならず、間もなく忘れられてしまつたことである。このような文明攝取の態度は、日本の場合と全然異つてゐる。

日本が五―六世紀に大陸や朝鮮半島から歸化人を迎えた時、一定の地域に居住せしめ、中央政府の管轄下に屬せしめてゐる。そして特定期間を限り上番せしめ、特殊技術に従事せしめ、終れば住居地に還してゐる。⁴⁷⁾このような組織立つた態度はついに北魏に見られなかった。（完）

追記 河地重造氏「北魏王朝の成立とその性格について」

は、いろいろ拙稿に關連する點多く、頗る裨益するところがあった。紙上を借りて御禮申上げる。

註

①河地重造氏「北朝王朝の成立とその性格について」東洋史研究12の5。

②内田吟風氏「北朝政局に於ける鮮卑及び諸北族系貴族の地位」東洋史研究1の3。

③山崎宏博士「北魏大人官について」史學雜誌54の8。佐久間吉也氏「北魏の領民酋長制について」福島大學學藝學部研究報告

④岡田芳三郎氏「後魏朝地方政治の實際」東洋史研究5の2。

⑤呂思勉氏「兩晉南北朝史」。伊瀬仙太郎氏「北魏の西域經營」昭和二十六年東京學藝大學研究報告。

⑥十六國春秋卷八二に張駿の墓を發いた時の奢侈品に關する記述が見える。

⑦「晉書」卷一一三 苻堅傳上同下

⑧「晉書」卷一一三 苻堅傳上

⑨「十六國春秋」卷八一後涼錄。魏書卷八五呂隆傳

⑩「魏書」卷二

⑪「魏書」卷二、卷一一〇

⑫道武帝は身分制を嚴命している。工巧には必ずその生業に服さしめ、強制的に生産に従わせた。商人も士人とは明かに區別された。

宮川尚志氏「北朝に於ける貴族制度上」に従えば（東洋史研究8の4）貴族、寒門、農工商の庶民、奴隸の諸階級に分れたと

いう。

明元帝も亦、百工、商賈は各々その分を守ることを教えている。爾來、西域貿易が展開され、商賈が多數渡米し、國內商販が頗る盛行した時、北魏王朝は商賈、工巧に分限を守ることを幾度か命令した。このことについては項を追うて本論に論ずる。

⑬「魏書」卷四上

⑭伊瀬仙太郎氏「北魏の西域經營」前掲研究報告書

⑮「隋書」食貨志「魏書」卷六七、邢辯傳。松田壽男博士「中央アジア史」支那人の西域經營の項

⑯「魏書」卷二、粟特國の條

⑰「北史」卷九七、太平御覽卷八〇七、珍寶部、瑠璃

⑱呂思勉氏「兩晉南北朝史」

⑲「魏書」卷四上

⑳「魏書」卷一一四 釋老志

太武帝の排佛の際、恭宗の豫告により各寺が金銀寶像の全濟を得た。又、太武帝がこの數年前、寺院の検査をした時、釀酒具とともに多くの藏物が出た。これは州郡牧守の寄せたものである。

㉑呂思勉氏「兩晉南北朝史」

㉒「晉書」卷一一三苻堅傳上、「晉書」卷一一四苻堅傳下

㉓「洛陽伽藍記」卷四、城内

㉔「魏書」卷四下

㉕「太平御覽」卷七九五 四夷部 悅般

㉖「魏書」卷五、和平二年正月、和平三年十月、和平四年三月卷六 和平六年九月

これら一連の詔は官吏を訓戒するのが主要な目的となっている。官吏の百姓侵奪を戒めることが多いが、西域貿易に伴う官僚層の努力増大と汚職の一面も考えなければならぬ。

27 「金石萃篇」卷二八 覃思伯碑

28 通鑑卷一三五 建元元年十一月の條

29 「北史」魏宗室傳、「周書」宇文貴傳

30 「通鑑」卷一七〇

31 「魏書」卷一〇一、吐谷渾傳

32 「北史」魏宗室傳、「周書」宇文傳、「通鑑」卷一一〇、「北齊書」卷四の諸例

33 魏書 卷八、延昌二年九月の條

34 「通鑑」卷一六七

35 「魏書」卷九 神龜元年、二年の條

36 「魏書」卷九 正光三年の條

37 「洛陽伽藍記」卷六、景樂寺の條

38 「魏書」卷六五 邢儁傳

39 岡崎博士「魏晉南北朝通史」「魏書」卷九、内田吟風氏「北朝政局に於ける鮮卑及び諸北族系貴族の地位」東洋史研究1の3

40 「魏書」卷九

41 婚姻制嚴守の詔令は一々本論に於て引用しなかった。

42 「魏書」卷七下

43 「魏書」卷七下太和十一年の條

冬十月辛未、詔して起部無役の作を罷む。宮人の機杼を執らざる者を出す

44 「魏書」卷二「魏書」卷三五 崔浩傳

45 「通鑑」卷一七六 太建元年の條、「魏書」卷十五 昭成子窟咄傳

46 マルクス「經濟學批判」宮川實譯

47 井上光貞「部民史論」(新日本史講座)

Official Trade under the Pei-wei 北魏 Dynasty

S. Maeda

The trade between Turkistan and China was opened since Wu-ti 武帝 of the Han 漢 Dynasty and came to be flourished toward the

regnal year of Tai-yen 太延 of Pei-wei. When the first wave of trade came, the Chinese Government caught it and gathered the Turkistan technicians under the direct control of the despotic Government. After a short interval the wave came on breast-high and even the nobles were engaged in trading transactions. We do well to remember the descriptions of Lo-yang-chia-lan-chi 洛陽伽藍記. The attitude of the Government toward this situation was the same—that is to regulate the trade because of its consciousness of the importance of the Turkistan goods for the Chinese economy. I am not of the ordinary opinion that China opened the trade only for lust of gain.